



東工大が生んだデザイナー 芹沢銈介のカレンダーの世界

伝統の型染めに命を吹き込み 人々を魅了

今から74年前、戦後間もなく食べ物も手に入りにくかった時期に、手仕事によるカレンダーで新しい時代に希望の灯をともし続けた卒業生がいた。染色工芸家で人間国宝の芹沢銈介である。彼は20世紀最後の巨匠と言われたフランスの画家バルテュスなど多くの作家に称えられるほどの画力を持ち、「型染」という伝統技法を近代化した形で使いこなし、カレンダーの他に着物・帯・のれん・ポスター・屏風・装幀・ガラス絵・展示室の内装など実に多くの作品を生み出した。随筆家の白洲正子は芹沢の着物を愛用していたそうだ。日々の膨大なスケッチから生まれた作品の数々は明るく、見る者を惹きつける。それは芹沢ファンのみならず、製作に携わる工匠や弟子達、さらには地方で手仕事に携わる人々の活力の源となった。東工大での学びが彼のその後のデザインや民藝の世界との関わりにどのような影響を与えたかを紹介していきたい。

はじめに

昨年(2019)の5月から元号が平成から令和に代わり、初の1月を迎えた。年の変わり目の主役は、何と云ってもカレンダーで、これ無しには私たちの生活は動かない。日めくりというスキンシップタイプもあれば、月単位のものなど形式は多種多様だが、カレンダーに命を吹き込み、私たちの生活に彩りを添え、時には元気づけてくれるのはデザインだ。

カレンダーのデザインで世界の人々を魅了した先輩(人間国宝になった芹沢銈介、図①)がいるので、(i)彼の生い立ち、(ii)本学の工業図案科での学び、(iii)その工業図案科の数奇な運命、(iv)「型絵染」との出会い、(v)主題であるカレンダー作り、(vi)その他の作品、及び(vii)ゆかりの人々などについて紹介したい。

1. 生い立ち(表1, p.4)

芹沢銈介(旧姓:大石、^{ふともの}②)は1895年(明治28)に静岡市の呉服太物卸商「大石商店」の7人兄弟の次男として生まれ裕福な家に育った。大石商店は、静岡市の近隣や県内の東西エリア、山梨県という広範囲に呉服の卸売を行っており、数ある市内の呉服太物

商の中でも圧倒的な賑わいを見せていた。店舗や倉、住居を構えた敷地の間口は町内の半分をしめていたというから驚きだ。

美術少年が東工大へ?!

幼少期から書などの芸術を楽しむ家庭に育った芹沢は、幼い頃から絵を描くことや図工を得意とする美術少年であり、次第に画家を志望するようになる。しかし1913年(大正2)3月8日に自宅や商家が全焼に遭ってしまい、それがもとで美術学校での

勉強を一旦諦めざるを得なくなってしまった。

しかし芹沢の画力は意外なところでチャンスを得ることになる。1913年(大正2)3月、静岡県立静岡中学校を卒業し、進学のため東京向島でレザー工場を営む叔父を頼り上京した。叔父の工場を手伝いながら洋画塾でデッサンを習い、自らの意思で(叔父の勧めは応用化学であった)東京工業大学の前身である東京高等工業学校工業図案科(注1)を受験し、1913年(大正2)7月9日に無事入学し、3年間



①(左) 芹沢銈介、(右) 2020年1月のカレンダー(1964年の復興版、制作:八尾和紙 桂樹舎、富山県)。



大石 銈 介

② 大石銈介，後の芹沢銈介。〔出典：卒業アルバム，大正四年卒業記念〕



東京高等工業学校工業圖案科製版印刷

③ 東京高等工業学校 図案科 絵葉書「隅田川對岸ヨリ望メル東京高等工業學校」
(東京高等工業學校 工業圖案科 製版印刷)

工業図案科にてデザインの基礎を学んだ。

同期に後に陶芸家となる濱田庄司，3学年上に河井寛次郎が窯業科に在学していたが，芹沢は2年次から，後述のように，上野の美術学校の校舎に通うことになり当時は互いに顔をあわせることはなかった。彼らは柳宗悦を中心とする民藝運動^(注2)の中心メンバーとして，卒後10年目に再会することになる。

どんな時でも

「美しいものづくり」を求めて

芹沢は生涯で10代，20代，40代と3度も自宅を失う災難に遭っている。しかしどのような時でも冷静に状況を見つめ，自らの次に進むべき道を前向きに考え，決めてきた。今回のテーマである「カレンダー」も同様で，第二次世界大戦直後，戦災で家族が住む家や仕事・道具など全てを失い約6年の間，仮住まいを余儀なくされた状況の中で製作を始めた。材料も人手も限られるとても厳しい中で，見る人が希望を感じられる明るいデザインや模様を模索し続けたのだ。

戦中，芹沢と交流のあった版画家の棟方志功^{むなかた しこう}は空襲の夜，芹沢が染めた風呂敷にくるまって寝ていたという。



④ 蔬果図 (静岡市立芹沢銈介美術館蔵)。蔬果: 果物や野菜



⑤ 東京高等工業学校 図案科絵葉書
(東京高等工業学校 工業圖案科 製版印刷)



(室刷印)場工版製

⑥ 製版工場 (印刷室) [出典：東京高等工業学校 卒業アルバム, 大正 2 年]

そこには「^{だいあんじん}大安心」と書いてあった。芹沢の作品には可愛さ、美しさを超越した包容力や強さがあるのかもしれない。また毎日のように描き続けてきた日常の風景やテーブル上の野菜などの膨大なスケッチが、色鮮やかな模様や様々な「作品」となり世に生まれていったのである(図④)。芹沢は自身の年譜で「美しきものへの思念が燃えていた」と語っている。

2. 東京高等工業学校

(本学の前身)での学び

2章ではまず、芹沢が学んだ幻の「工業図案科」について説明する。本学は1881年(明治14)に、工業現場の指導者や工業教員の養成をめざす高等教育機関として「東京職工学校」という名称で蔵前に設立された。1901年(明治34)に、第2代校長の手島精一の「^{おびただ}現近の実業上に就いて観察すれば、大いに意匠図案を要するものが多いので、図案家^(注3)の供給は非常に^{おびただ}夥しい^(注4)」という考えのもと、「工業図案科」と「建築科」が開設された。工業の現場において、技術の向上と合わせてデザイン性の高い製品づくりができる人材育成が重

要であったようだ。「デザインといえれば美大なのではないか?」と思われるかもしれないが「工業製品は、性能はもとより使い易く美しくなければならぬ」(とっておきメモ帳3参照)という考えのもと工業品の図案者の養成を目的とし、工業図案科が設置されたのだ。当時のデザイン教育は、官公立専門学校では本校、上野の東京美術学校(1896年~)、京都高等工芸学校(現京都工芸繊維大学,1902年~)、京都市立美術工芸学校(1907年~)のみで開設され、私立では設置されていなかった。

東京美術学校の図案科は、金工や漆工、建築装飾図案、染織等などの伝統的美術工芸の図案教育が主であり“商業”図案とは異なるものであった。

本校の工業図案科は、「製造と図案の両方に関する知識」を持ち合わせる図案家の育成を目指し、明治34年に新しく「本製版工場」を設け、製版、印刷、写真の各技術を教養内で絵葉書を製作するなど(図③、⑤、⑥)、実践的な工場実習が行われていた。

当時の印刷業界は、石版やその他の技術が大いに発達していたが、これ

らの技術者の育成は民間の工場でわずかな人数を養成する以外に、印刷の技術と原版作成に必要な写真製版の技術を身に付けさせる機関がほとんどなかったという。また、研究においては「大日本印刷百三十年史」によると、明治38年に結城林蔵教授がドイツ、オーストリアへの留学を終え、散粉法によるフォトグラビア印刷の研究を始め、その後増子保造研究生、伊東亮次助教授らによって精力的に研究・開発が行われ大正期に入りグラビア印刷が本格化した。

このような新時代に向けた先鋭的な授業や研究が行われていたさなか、工業図案科を除外した旧制大学昇格の話がもちあがってしまう。教職員、卒業生の抗議の声も多数あったが、届かず1914年(大正3)9月5日、文部省から正式に同科を廃止し在校生は卒業まで東京美術学校に委託する旨の省令が告示された(詳細は、本シリーズ「とっておきメモ帳3」“東工大と千葉大の意外な関係”参照)。

創設から17年間の「短命の図案科」であったが、その間に約200人の卒業生を輩出し、彼らは官公庁、教育機関、民間、自営工場で図案や印刷

表 1. 芹沢銈介の略歴

西暦	和暦	年齢	できごと
1895	明治 28	0歳	静岡市の呉服商 大石角次郎の次男として誕生
1908	41	13歳	静岡中学に入学。この頃から美術学校進学を希望
1912	45	17歳	同校卒業。家運が傾く。上京し叔父の家で進学準備
1913	大正 2	18歳	東京高等工業学校（現東工大）工業図案科入学
1914	3	19歳	工業図案科が上野の美術学校（現芸大）に移管；在學生は東京高等工業学校所属のまま委託扱い
1916	5	21歳	同校卒業。静岡の実家に戻る
1917	6	22歳	芹沢たよと結婚。静岡工業試験場に勤務
1921	10	26歳	大阪府商工奨励館の懸賞ポスターに入選。同図案課勤務。その他の懸賞にも多数入選。翌年退職し帰郷
1924	13	29歳	親戚の病院が倒産、保証人の芹沢家も破産、借家住まい。「ろうけつ染め」を始める。
1926	15	31歳	柳宗悦（やなぎむねよし）・河井寛次郎・浜田庄司らが民芸運動を創始
1927	昭和 2	32歳	柳宗悦の論文「 工芸の道 」に感銘
1928	3	33歳	沖縄 紅型 （びんがた）の風呂敷に出会い驚嘆
1934	9	39歳	上京し、蒲田に工房を構える。
1939	14	44歳	那覇で紅型の技を習得
1943	18	48歳	和紙に型染めする「 型絵染 」技法を完成
1945	20	50歳	戦災で工房など全て焼失。 型絵染カレンダー の制作開始
1946	21	51歳	「 萌木会 」を創設
1947	22	52歳	柚木沙弥郎（25歳、東京帝大で美術史専攻）を弟子として受入れ
⋮	⋮	⋮	⋮
1953	28	58歳	土手武彦（16歳）を弟子に
1955	30	60歳	蒲田の自邸内に芹沢染紙研究所を設立（カレンダー／カード／うちわ／マッチのラベル／テーブルセンター等を量産）
1956	31	61歳	人間国宝；「 型絵染 」が重要無形文化財に指定され、知名度が全国的に
1956	31	61歳	山内武志（染物屋を営む知人の息子、18歳）を弟子に採用
1976	51	81歳	文化功労者
1984	59	88歳	逝去（心不全）

業の仕事に就き活躍した。

次に芹沢が入学した当時（大正2年）の工業図案科について見てみると：受験者45人のうち、合格者16人という人気の学科であった。^{（注5）}

工業図案科に割り当てられた教室は、本校舎（**図7**）の1階、2階、3階にわかれて約190坪（約627㎡）の実習室があり、図案実習室、製版実習室（撮影室、暗室、製版印刷機器を含む）などが揃えられていた。

教員陣は、松岡壽教授（科長／図案構成法、洋画、図案実習）、結城林蔵教授（工場長／光化学、製版実習）、鹿島英二教授（図案科長／工藝史、有職故実、図案実習；1901年7月工業図案科卒業生）、矢野道也講師（色彩学、印刷局技師工学士）、田原正人講師（博物、理学士）、安田祿像助教授（外国留学中；1901年7月工業図案科卒業生）、伊東亮次助教授（光化学、製版実習；1910年工業図案科卒業）、小野精一（嘱託／図案実習）、廣瀬濟（嘱託／日本画）、人見治三郎（師範職工／製版実習）が教鞭をとっていた。安田・鹿島は工藝史及び図案実習、結城・伊東は写真及び印刷

術概説と実習を担当していた。

入学後は、平日8時から午後4時まで学科と実習の授業を毎週39時間受けた。**1年次**は1日の3分の2が図案と容器画・西洋画・日本画の絵画実習にあてられ、英語も毎週4時間設けられていた。**2年次**からは東京美術学校に移管されたので上野で授業を受けることになり、工場実習（写真撮影や印刷製版）の6時間が増え、**3年**

次になると図案に関する授業が18時間、工場実習が8時間に増えた。まず絵画技術を身につけさせ、その絵画を図案化し、それを写真と印刷の複製技術によって大量に普及させていくという流れで技術を身につけさせたのがわかる。これらの一連の技術は芹沢のその後の仕事となる染色の工程とよく似ているように伺える。



⑦ 東京高等工業学校 本校舎（正門側、後方を隅田川が流れている）。

3. 東京美術学校へ移管

大正3年9月の新学期から工業図案科は松岡科長、専任教官^(注6)及び1～3年次の学生約50名全員が上野の東京美術学校(現藝大)へ移動した。芹沢本人による「自筆年譜」によると「東京高等工業学校が大学昇格をするため図案科は東京美術学校に委託さる。向島より浅草六区を通過して通学す。製版印刷の実習」と書かれており、印刷の工場実習など2年次以降に予定されていた科目を上野の東京美術学校の構内で学んでいたのが分かる。

芹沢の2年先輩である齋藤信治氏(大正元年入学、大正4年卒業)がデザイン誌「デザイン1」(1962、美術出版社発行)に投稿した記事によると、校内の雰囲気は本校と幾分異なったそうで、近隣の博物館や動物園に自由に通うことができ美術学校の図書館の豊富な図書や参考品を閲覧することが可能であったので、学ぶ学生にとっては悪い環境ではなかったのではないかと見受けられる。また叔父の下宿先から演芸場や劇場が立ち並ぶ浅草六区を毎日楽しみながら通っていたようだ；「あちこちに誘惑がありましてねえ」とテレビ朝日「徹子の部屋」に出演した際に語っていた。^(注7)工業図案科の廃止決定後に在學生は蔵前・上野両校舎で学んだが、卒業証書は大正3年時入學生が卒業するまで本校から交付を受けた。芹沢は卒業後静岡に帰郷した。同期生達の進路は主に自営、印刷所、工作所であった。

4. 工業図案科の多彩な卒業生たち

残念ながら芹沢が実際に工業図案科で学んだノート等は残されていないが、同時期にクリスタルガラスメーカーである「カガミクリスタル」の創業者^{かがみ こうぞう}各務鑛三(1896～1985)が1914〔大正3〕～1915〔大正4〕年に工業図案科選科に在学(卒業後、本校窯業科の嘱託職員として板谷嘉七(板谷波山)の後任として大正6年まで勤務)していた。

そんな彼が後に芹沢の展覧会(昭和53年10月6日～11日/西武百貨店静岡店)の図録に寄せた「画学生の想い出」という文章に興味深い一節がある。

「図案科は本館の二階の一隅にあって、科長は洋画家の松岡壽先生、鹿島英二先生、そして後日芝浦の高等工芸学校(現千葉大学)の校長とされた安田祿造先生等で、芹沢さんはこれらの先生について学業にいそしみ、本日の大成の基礎を築かれたのです。当時ヨーロッパでは、マルゴールド(Emanuel J. Margold, 1888-1962)、そしてホッフマン(Joseff Hoffman, 1870-1956)などによって創まった新しい様式即ちマルホッフ式^(注8)と称した図案が大流行していました。それは線と線との間に丸や三角の花模様をちらしたもので、安田先生も洋行帰りの土産にと、学校の記念日に全校このデザインで飾られたものです」と述べている。当時、図案家の知名度はまだまだ高いものとは言えなかったが、このようにヨーロッパに留学した教員の話は学生達の刺激や励みになったであろう。

芹沢は「染色家」以外に、小絵馬や国内外の民俗品や道具などの「蒐集家」というもう一つの顔を持っている。本校の卒業生で芹沢の先輩であり、のちに蒐集を行う際の「先輩」となった^{すぎやま すえお}杉山寿栄男(1885-1946)という図案家で、かつ縄文土器・アイヌ工芸研究・収集家がいる。彼は、1908年〔明治41〕～1909年〔明治42〕に工業図案科選科で学び、卒業後は大日本麦酒や明治屋の美人画ポスターや雑誌の表紙を手掛けていた。そのかわら仏像や雛人形の収集を趣味とし、1923年〔大正12〕には縄文土器の文様にも興味を持ちはじめ、その後『原始文様集』、『上代文様集』、『アイヌ文様』(1926)、『日本原始工芸』(1928)、『ヒゲベラ』(1933)、『アイヌ芸術』(1941-1943)など、写真と拓本を多用した図集を刊行していた。

「杉山さんは、私の母校の蔵前工校図案科の先輩で印刷図案の草わけであり、専門の図案の他に考古学的な資

^{おびただ}料の夥しい蒐集とその方面の研究で知られ、一面好古家の風があり在野の一存在だった。」と芹沢が述べている(芹沢銈介 装幀集7、第七回頒布分付録 1970〔昭和45〕年、出版元:吾八)。工業図案科が多彩な卒業生を輩出していたことがわかる。

5. 卒業後故郷静岡への帰郷

1916年〔大正5〕の卒業後は故郷静岡に戻り、特定の仕事に就かずスケッチなどをして過ごしていた。そこに縁談の話が入り、1917年〔大正6〕2月に芹沢たよと出会い芹沢家の婿養子に入り、大石から芹沢姓となった。

友人達と図案社を立ち上げ、店舗の装飾や広告、祭りの花車などの製作を手掛けたが、1918年〔大正7〕には静岡工業試験所に技手として就職した。そこで地元である静岡の業者や職人に関わりながら^{まきえ}時絵・漆器・木工・染色・紙などの図案の指導を行った。この間は、職人の仕事や生活に触れることができ、芹沢本人にとっても学びの多い期間であったようだ。そして、画家を志してきた芹沢にとって、伝統技術を体に徹底的に叩き込み抜かれた無駄の無い職人の仕事への憧れにつながっていくのである。新たな芸術表現の模索と職人の仕事への理解が、その後の芹沢の仕事により視野の広いものにした。

1919年〔大正8〕に工業試験場の敷地内に設立された静岡県立静岡工業学校で教授嘱託として教鞭をとり、その後大阪府立商品陳列所図案課技師として意匠図案の調査・研究などを行う職についた。その間にも新聞広告や公募展に応募し入賞を重ね、デザイナーとして高い評判を得ていたが、芹沢は「図案という表面的なものではなく、より具体的な“物”をゼロから生み出すことに自分を見出したい」と考えるようになった。若き日に美術を志し、近代デザインを学び、画力を活かし順調に仕事をしていたように見えるのだが、自分の「ものづくり」の理想的な在り方について深

く模索していたのだ。

6. ものづくりの転機

二つの出会い

そこにある転機が訪れた。1927年〔昭和2〕、「人生の師」^(注9)と生涯慕い続けることになる^{やなぎ むねよし}柳宗悦との出会いである。友人と朝鮮に旅行に向かう船の中で読んだ柳宗悦の論文「**工芸の道**」に深い感銘を受け、これを自らの一生の仕事にすることを決めたのである。柳は「生活から切り離された“美術”ではなく生活に密着した工芸こそが重要である」と説いたのだ。「長年悩みつづありし工藝に関する疑問氷解し、工藝の本道初めて眼前に拓けし思いあり、生涯かかる感動的文章に接せしことなし」と書き残している。そして、もう一つは、1930年〔昭和5〕に上野で開かれた大礼記念国産振興博覧会での沖縄の^{びんがた}紅型^(注10)風呂敷との出会いだ。それまでに、蠟を筆につけて絵を描き、絵の部分が白く抜けるようにする“ろうけつ染め”を行った経験はあったが、型と防染糊を用いて糊のつかなかった型の部分(図12)に色差しをして仕上げる伝統的な「型染め」の一種である『紅型』の色・模様・材料の美しさに感動し圧倒されたという。この「二つの出会い」が芹沢のその後の人生を決定づけた。

7. 芹沢カレンダーの誕生

(芹沢染紙研究所、蒲田)

芹沢のカレンダーは終戦直後の1946年から販売され、生前38年間にわたり自身が手がけ、没後1985年からは復興版として現在まで約70年以上も続く商品である。現在は芹沢の弟子であった^{ついで}土手武彦氏(1936～)が型を彫り、富山県の越中八尾和紙^{かき}桂樹舎で製作されている。今回、女子美術大学美術館や東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館(宮城県)にカレンダーの調査に伺ったところ、1年に2種類以上のカレンダーが作られた年もあり、全体の図案や枚数の把握は難しいが、400種類^(注11)を超えることがわかった。和紙を縦向きに使う染められたものが基本形であるが、3ヶ月が1枚に印刷されたものや、企業名が入ったカレンダー、12ヶ月が1枚に印刷されたポスターのようなカレンダーなどがあった。最盛期には1万部を国内外に出荷したというから、彼の多くの作品の中でも最も普及した「作品」といえよう。芹沢は自らの型絵染カレンダーを「型絵紙染暦」と名付け「絵暦」とも呼んだ。^(注12)

カレンダーの製作のきっかけは、太平洋戦争の終戦直後1945年〔昭和20〕の秋、民藝店の銀座たくみ^(注13)の当時責任者であった^{やまもと}山本正三と精

神科医・分筆家として美術・民藝運動に携わってきた^{しきば}式場隆三郎からの提案であった。芹沢自身も「こんな状態でも何か美しいものを作りたい」と考えていたようで、昭和21年のものは当時芹沢が関心を持っていた中世ヨーロッパのデザインを参考にし、異国情緒あふれる仕上がりとなった。

銀座たくみでは米英の軍人の家族たちが母国に送るクリスマスギフトの品を探していた為、クリスマスギフトショーが企画され、「今の生活に適した」新作民藝品の検討会が行われ、第一段として芹沢の型絵染カレンダーが提案された(民芸運動機関誌「工芸」第736号、2014年4月号、p.16)。

染色家の^{ゆのき さみろう}柚木沙弥郎氏(1922～)は、このカレンダーが岡山の大原美術館で売られているのを見て「染め物だと思わなかったし、今までに見たことがない綺麗なものだった。植物の曲線や字が繋がっている。文字でも絵でもない「模様」の世界に衝撃を受けた」とこれまでに目にしたことのない染めものの美しさに衝撃を受け、弟子入りを決心して東京へ向かったそうだ。柚木さんは東京帝大で美術史を専攻中に学徒出陣；東京田端の家が戦災で焼失していたために、父の生家のあった倉敷に復員し、大原美術館で働いていて芹沢の作品に出合ったのだ。焼け跡の日本の日



⑧ 自宅 & 工房跡地にある芹沢記念碑 (大田区西蒲田；石碑設置場所に玄関があった)



⑨ 伝統的な型染めの手拭いを製作中の山内武志さん(芹沢の弟子、静岡県浜松市在住)。11月後半に伺った際は、幸い風もなく、美しく染めあげられた布が広い庭いっぱいになぶ様は圧巻だった。

常を希望で照らすカレンダーだったに違いない。

1934年〔昭和9〕、当時39歳であった芹沢は一家6人と昭和8年に鳥取から入門した岡村吉右衛門、職人の塩沢虎之助とともに、民藝運動の支援者である水谷良一氏の厚意によって与えられた東京市蒲田区蒲田町127番地（現在の大田区西蒲田）に拠点を移し、500坪ある土地に住まいと工房、干し場を設けた（図8）。

1945年〔昭和20〕、戦災で家財や工房、作品、型紙、写生帳、自らが集めた収集品など全てを失ってしまい、秋頃から柳宗悦が館長を勤める日本民芸館の宿直室に仮住まいを余儀なくされていた。そんな制作場所の確保の難しい中、第一号である1946年〔昭和21〕のカレンダーは、1945年〔昭和20〕秋頃から、たよ夫人や仲間とともに1ヶ月ごとに制作し、12月中旬には12ヶ月分の型が仕上がりに、和紙に手作業で染めた。当初は印刷で作ることを想定していたが間に合わず何とか手に入った和紙と染めが結びつき、手染めによるカレンダーが誕生した。それらは1946年〔昭和21〕初頭、たくみや荻窪いづみ工藝店で販売されるようになった（『工藝』第378号、昭和59年6月号、特集「芹沢銈介作品と日本民藝館葬」）。

芹沢カレンダーの特徴は、独特な書体と趣向を凝らした鮮やかなモチーフ、そして構図にあると考えられる。1946年〔昭和21〕のカレンダー（図10）の曜日に注目してほしい。七曜日がすべて日本語で表記されている。曜日と数字の文字が、まるで西洋中世の写本や挿絵を彷彿させるかのような繊細な独自のカリグラフィーで書かれ、それらが鮮やかなアーチなどのモチーフとともに配置されている。

「この時期、中世の美術、特に古写、挿絵本等に心酔していたので図柄は中世風を追うことになった。この最初のカレンダーが柳師（芹沢が我が師と仰ぐ柳への敬称）の食堂に大きな白ぶ



10 1946年1月のカレンダー



11 型染グリーティングカード

ちの額に入れて掲げてあるのを見た喜びは今もありがたく思い出されると述懐している（芹沢銈介装幀集7、第七回頒布分付録 1970〔昭和45〕年、出版元：吾八）。苦勞して仕上げたカレンダーただだけに、それが尊敬する柳宗悦の家に飾られた喜びに溢れる文章である。

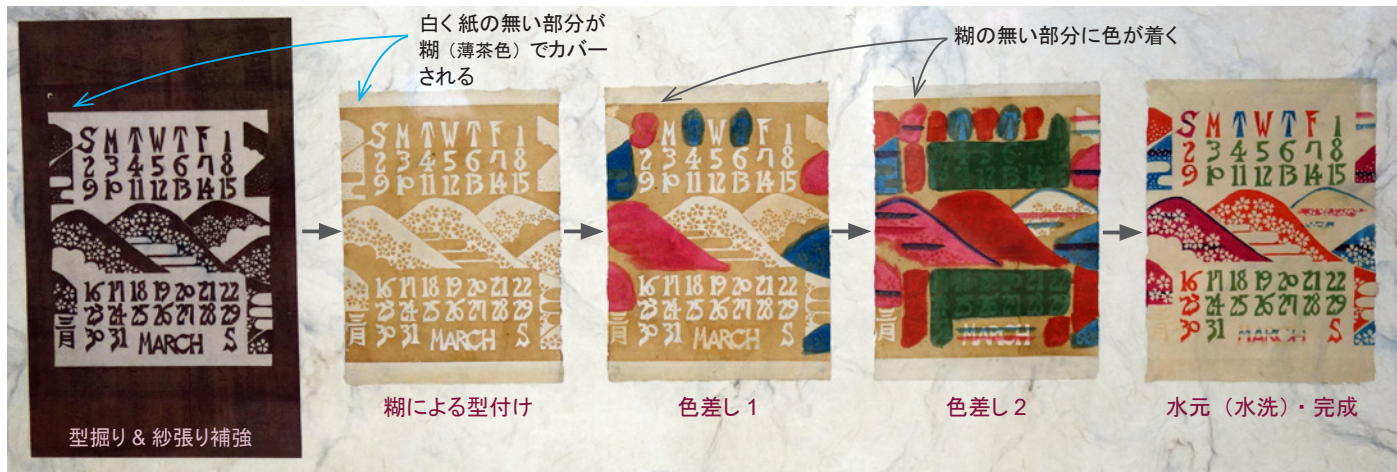
38年分のカレンダーは時代ごとに少しずつ変化を見せ、他の作品の製作をこなしながらも4月になると染を行う職人に急かされ、描くテーマ選びに苦勞していた。花鳥風月、日本昔話、全国各地のお祭り、季節の花々、各地の玩具など多彩な図案は使うものだけでなく、製作に携わる工人達の目をも楽しませた。

カレンダー製作において芹沢のものづくりに変化が現れる。2年目となる1946年〔昭和21〕には、製作の人手不足や材料調達の困難を解消するため「萌木会」（注14）という染色を志す若者や職人の組合をつくった；後に作品の研究会に発展していく。1951年〔昭和26〕になり、ようやく蒲田の自宅に戻ることができ、1955年〔昭和30〕には自宅兼の「有限会社芹沢染紙研究所」を開設し（図8）、カレンダー（図10 13）・団扇（うちわ）・ギフトカード・クリスマスカード（図11）・本の装丁（図14）などの大量の数の製作を可能

にした。

芹沢の弟子であり、現在も故郷浜松にて染色の仕事をしている山内武志氏（1938～）の工房に伺った。浜松は古くから染物の産地であり、山内さんのご自宅は江戸時代から続く「紺屋」と呼ばれる染物屋であった。野外での作業が主なので天気がとても重要である。浜松は風が強い日が多く、屋外で作業できる日は限られる。11月に伺った際は風もなく晴天で、山内さんは屋外に均一に干された「てぬぐい」に糊付け作業中だった（図9）。山内さんは、1956年〔昭和31〕春に高校を卒業し、芹沢と知り合いであった父の勤めで6年間、芹沢染紙研究所で修行をしたとのことだった。

工房（芹沢染紙研究所）では布へ染める仕事と紙へ染める仕事の2つに分かれており、山内さんは紙班の責任者としてカレンダー・うちわ・扇子・看板・建築会社の株券など多数の制作に携わったという。山内さんは糊付け作業の担当で、カレンダーは最盛期では1万組（約12万枚）の糊付けをしていたと言うので想像もつかない程である。仕事は先輩の土手武彦さんから引き継いでいたという。山内さんは工業高校出身で染色技術や工業化学、工場経営などを学んでいたため、工



⑫ 型染工程の実際を説明した5枚組 (東北福祉大学 芹沢銈介 美術工芸館 所蔵; 矢印と説明文字は筆者が挿入)

房で働く際に染色に関する苦勞はなかったが、「同じ技術なのにどうしてこんなにおもしろいものができるんだろう」と芹沢のデザインに圧倒されたそうだ。話しを伺うなかで、当時10代であった山内さんにとって芹沢は気難しく怖い存在であったようだが、屋外に干されたてぬぐいを見せていただきながら裏側まで美しく染まっているのを見て、芹沢から譲り受けた一切妥協のない仕事を感じた(図9)。

8. カレンダー製作 (型絵染) 過程

カレンダーの制作は大きく分けて以下の5つの工程からなる(図12)。

- ① **型彫り**：芹沢が薄い和紙やトレーシングペーパーに下絵を描く。それを和紙に貼り、型板の上に置き小刀で掘って型紙を作る。
- ② **型に紗を貼る**：細い絹糸で荒くメッシュ状に織った「紗」で型紙を補強する。この作業を「紗ばり」と呼ぶ。
- ③ **型付け**：紗貼りした型紙を和紙の上に置き、上から糊(糯米の粉、糠、石灰、塩を混ぜて練ったもの)付けをしていく。染めたくない部分に糊付けをすることで色が付くのを防ぐことができる(防染と呼ぶ)。ここまでの工程が済むと「塗り絵」のような線と色を付ける箇所が白抜き状態になる。
- ④ **色差し**：色をつける箇所に空白が

出来ており、そこに色付け作業を行う。

- ⑤ **水元**：色差しの後、水に浸して糊をふやかし、小ほうきでたたきながら糊を落とし、完成させる。

カレンダーは芹沢工房で実際に染められているのはわずかで、糊を置き乾燥した状態になった和紙50枚ずつの束にして、色差しされた「見本」と一緒に、富山や横浜、鎌倉、川崎、鶴見など工房以外の外注先や内職の方々に送り、色差しの作業を1枚8円や12円でお願していたそうだ。

そして色差しされて戻ってきたものを山内さんら工房の人たちが点検するという仕組みであった。染めの作業は手間がかかるためこのような仕組みを作り増刷に努めたという。山内さんは工業高校で学んだことを活かしながら、工房の中でどの位置で作業をすれば効率良く大量に作る事ができるかなどを考えながらアルバイトを含むたくさんのスタッフと一緒に製作に励んできた。

工房の運営方法には芹沢の考えがあり、以下のように述べている：「染色の仕事はおのおの手分けして工程を進めるので、それぞれの持ち場がほしくて、自分だけではどうにもならないのです。工人を集め、自分は図案と指示に当たる、自分がいるからこそ物が生まれるという状態に持っていきたいと思って一つの組織とし

ての研究所を夢見ていました」(芹沢銈介全集第10巻/月報3, pp.1-6, 1980年〔昭和55〕10月)。

芹沢は現在も人気のある北欧テキスタイルデザインの「マリメッコ」(注15)に憧れていたという。作品はもとより、規模の大きな工房でたくさんのスタッフとのもの作りを目指していたと思われる。

最後に大量の紙染めの仕事に関わった山内さんにお話を伺っている中で、芹沢の最も大きな貢献は「カレンダーやのれん、うちわなど日常的な物にデザインの力によって付加価値をつけ、新しい需要の形を創造してくれたことである」ということがよく納得できた。

布から紙製へ 八尾和紙の桂樹舎との連携

カレンダーのもう一人の「主役」とも言える和紙に、もう一つのドラマがあった。戦後間もない時に柳宗悦が富山の越中紙社の吉田桂介氏(注16)が手がける越中和紙(八尾和紙)を芹沢に紹介したのだ。戦後、布が手に入りにくくなり、紙に染めることを考え始めていた芹沢はさっそく和紙に型染めを行うことはできないかと吉田氏に相談を持ちかけた。元々、八尾和紙は襦などにも使えるほど丈夫な「加工紙」であり耐久性のある紙であったが、水をくぐらせる染めに耐えうる独自の防水・防汚化工の和

紙の開発には試行錯誤が必要だった。

1955年〔昭和30〕頃からカレンダーの仕事が激増した。そこで、芹沢から吉田氏に「和紙の供給だけでなく、カレンダーの仕事も手伝ってほしいか」と持ちかけたところ、「染めの技術を教えてくれたらやります」と提案したことがきっかけとなり、取得した染めの技術を従業員に伝え八尾の和紙に「型染め」の技法が根付き、現在も様々な商品が作られている。

戦後、手漉き和紙が売れなくなっていく中で、芹沢のカレンダーは主力商品となり現在も人気を博している。芹沢のカレンダーはデザインだけでなく、染めという側面からも和紙の可能性を広げたとと言える。

9. 芹沢銈介のカレンダーから見る 手仕事、ものづくりとは

東工大から染色工芸家、デザイナーが輩出されたというのはとても意外に映るかもしれない。今回、和紙を使った多彩な図案のカレンダーをきっかけに、ものづくりやその基盤形成に寄与したと考えられる東京高等工業学校工業図案科について調査を行った。多彩な作品、鮮やかな図案で知られる芹沢だが、その裏では度重なる災難に合い度々窮地に立たされたであろうことが想像できる。戦後の東京の様子を語る印象的な一節がある：「(1951年〔昭和26〕)東京の空気がきれいなことばかり浮かんできますねえ。干し物や人間の身体の中へ浸み込むような気持ちがしましてね。そこへジープがすごいスピードで通るでしょう、本当になんともいえない感じがあったなあ。それにいろんな可能性と希望に溢れていましてね、戦争に負けたというよりも、何かこう生き返ったという実感がありましたねえ」(芹沢銈介全集、第16巻、月報17、pp.1-6、昭和56年12月)。焼野原からの再出発の意気込みが清々しいほどに感じ取れる。

芹沢は、「師」として生涯尊敬した柳

宗悦の唱える「用の美」を追い続け、先人達から受け継がれた伝統的な型染めや全国の手仕事に敬意を払いながら創造し続けた。「多くの人の日常に彩りを与える」芹沢のものづくりの精神は弟子たちを通して現代にも受け継がれている。そして鮮やかに躍動的な文字のカレンダーから日本のものでづくりの気高さが感じとれる。

謝辞

この度の調査に際し、以下の方々に貴重な作品の閲覧・画像提供、及び取材対応などのご協力を賜りました。

芹沢恵子

静岡市立芹沢銈介美術館

女子美術大学美術館 (JAM)

東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館

柏市

銀座たくみ

吉田泰樹 (有限会社桂樹舎)

山内武志・アトリエぬいや

濱田淑子

鎮目良文 (たばこと塩の博物館)

柚木沙弥郎

寺本美奈子 (武蔵野美術大学)

木田拓也 (武蔵野美術大学美学美術史研究室)

武蔵野美術大学美学美術史研究室

(注1) 東京高等工業学校は当時、台東区蔵前一丁目から柳橋二丁目の北側にまたがる場所(東京市浅草区蔵前片町)に所在していた。当時の敷地は1万1790坪(約39,000㎡)で、煉瓦造りの校舎や木造の各科の実習工場などが建ち並んでいた。周囲には「蔵前3本の煙突」で知られる東京電燈株式会社の浅草発電所があった。

(注2) 民藝：1928年〔大正14〕に哲学者である柳宗悦が、「美しい」とみられてこなかった民衆の用いる日用品や無名の職人達による手仕事の民衆の工芸に美しさを見出し「民藝」と名付けた。1928年に工芸論「工藝の道」を発表し、芹沢に影響を与えた。

(注3) 図案：装飾的に描かれた絵や模様、図柄のこと。デザイン。明治期は着物などの様々な工芸品の下絵が「図案」と呼ばれていたが、新たな職業領域として図案

専門に製作する「図案家」が成立した。有名な図案家に杉浦非水などがいる。模様について柳宗悦は「凡ての無駄を取り去って、なくてはならないものが残る時、模様が現れる」と述べている(「柳宗悦コレクション2もの」、ちくま学芸文庫、2011)。

(注4) 手嶋精一談話「図案科設置の理由」、『図按』、明治34年12月1日、「デザインの揺籃時代展」の図録。

(注5) 工業図案科の試験内容は英語、数学、物理及化学、図画であった。さらに出願時に書類と一緒に草花と鳥類の写生画を各1点ずつ提出する必要があった。

(注6) 結城林蔵(教授、製版術)、鹿島英二(教授、図案法)、安田禄造(教授、図案法)、伊東亮次(助教授、製版術)、

(注7) テレビ朝日「徹子の部屋」(対談)昭和55年10月27日放映；静岡市立芹沢銈介美術館監修『芹沢銈介の静岡時代』、静岡新聞社、2016。

(注8) マルホッフ式：ヨーゼフ・ホフマンや、マルゴールドの作品から「白と黒」が一つの流行となり、渦巻線と直線を併用した「マルホッフ式」が生まれ、アール・ヌーボー(Art nouveau；植物の枝やツルを思わせる流れるような曲線が特徴)に劣らぬ影響を世界各国に与えた。

(注9) 人生の師とは、芹沢にとって柳宗悦は一生で唯一の「先生、師」と呼べる存在であったようだ。

(注10) ^{びんがた}紅型：沖縄を代表する伝統的な型染めの一つで、王族・士族や琉球舞踊の衣装に用いられてきた。起源は13世紀からと言われている。びんは色彩、がたは模様を意味する。大胆で鮮やかな色彩、力強い図柄が特徴である。自然豊か風土の中で生まれ育まれてきた沖縄の伝統工芸。

(注11) オリジナルカレンダーのデザイン：◆1947年制作「クラコ」付録、別製布染カレンダー(2か月1体型：1955年1・2月、3・4月、5・6月、7・8月、9・10月、11・12月)、◆企業名入りカレンダー(銀座たくみ、YANASE, JAPAN AIR LINES, ざくろ)、◆3か月1体型カレンダー(1957年、1962年)◆カレンダーの絵の部分のみ(1970年「京の門」シリーズ、1971年「京の奇祭」シリーズ、「京の昔

話」シリーズ), 芹沢銈介全集 31 卷, pp. 17-48, 中央公論社。

(注 12) ^{かたえぞめ}型絵染: 芹沢銈介が 1956 年〔昭和 31〕に人間国宝に認定された際に、室町時代末期から続く伝統技法「型染」と区別するために考案された用語。従来の「型染」は分業で進められるのに対し、「型絵染」では一人の作家が全行程に一貫して関わることに^{もんよう}より、より個性的かつ芸術的な文様表現が可能になる。伝統的な型染では、色の数だけ型紙が必要だが、型絵染では一枚の型紙しか使わない。それゆえ、簡潔で意匠性に富んだ構図が求められる。

(注 13) 銀座たくみ: 東京都中央区銀座 8 丁目にある民芸店。全国の民芸品を販売する拠点としての創業は 1933 年〔昭和 8〕で、駒場の日本民芸館よりも古く、創立発起人として柳宗悦・濱田庄司・富本憲吉・芹沢銈介・志賀直哉らが名を連ねた。

(注 14) 萌木会: 1946 年〔昭和 21〕、染色に従事する仲間で作った染色協同組合。布地、染料、その他の資材の共同仕入れや販売や会員による共同展を百貨店で恒例化し行うなど精力的な活動をみせていた。「萌木会染色協同組合」理事長: 柚木沙弥郎, 理事: 長沼孝一, 小島直次郎, 関口信男, 三代澤本寿, 監事: 大橋豊久, 坂和正春, 四本貴資, 大橋隼雄, 大橋秀雄, 立花長子など(志賀直邦, 『民芸の歴史』, p.270, ちくま学芸文庫)。

(注 15) マリメッコ: 1951 年にフィンランドで設立されたアパレルブ



15 1952 年 4 月のカレンダー (横型)。縦型 (絵が上で、数字が下) が標準で、多く製作されたが、このカレンダーのように横型のものは比較的めずらしい。

ランド。大胆でカラフルな花の模様が特徴で、その商品は現在日本を含め世界約 40 カ国で販売され愛されている。

(注 16) 吉田桂介 (1915 ~ 2014): 満州事変 (1931, 昭和 6 年, 16 歳) 以降、機械製の紙に押され、手すき和紙がすたれる中、生まれ故郷の八尾で伝統的に作られてきた和紙 (八尾和紙*) を存続させたいと模索していたときに、柳宗悦が「工芸」誌で和紙の工芸の魅力を語っているのに接し、生涯を和紙で貫く決心をした (1937 年〔昭和 12〕, 22 歳)。そして、一面識もない柳

を日本民芸館に訪ね、決心を伝えると共にアドバイスを貰った。「型絵染」を習得するために、芹沢銈介に師事したのは 1947 年〔昭和 22, 32 歳〕。現社長の吉田泰樹氏も芹沢工房で型絵染を習得している。* 八尾和紙: 字を書くための紙ではなく、加工用の紙として製造され、「富山の薬売り」が使用するカバンなどに利用されていた。

2020 年 3 月

執筆: 桐明 紀子

発行: 博物館 資史料館部門

博物館 部門

東京工業大学 博物館

資史料館 部門

152-8550 東京都目黒区大岡山 2-12-1-E3-12 03-5734-3347 centsairy@jim.titech.ac.jp
http://www.cent.titech.ac.jp/

佐藤 勲 (館長, 総括理事・副学長)
山崎鯛介 (教授, 副館長, 博物館部門長)
広瀬茂久 (特命教授, 資史料館部門長)
奥山信一 (教授, 兼任)
金子寛彦 (教授, 兼任)
野原佳代子 (教授, 兼任)
大竹尚登 (教授, 兼任)

亀井宏行 (特任教授)
宮前知佐子 (研究員)
酒井正好 (事務職員)
佐々木裕子 (事務限定職員, 学芸員)
桐明 紀子 (事務支援員, 学芸員)
綿谷真理 (事務支援員)
渡辺菊乃 (事務支援員, 資史料館)

鎌田祐輔 (事務支援員, 資史料館)
本間英子 (事務支援員, 資史料館)
桑原千佳 (事務支援員, 資史料館)
渋谷真理子 (事務支援員, 資史料館)
広報・社会連携課 (博物館担当)
堤田直子 (課長)
太田邦之 (社会連携グループ長)
岡部史郎 (事務員)

芹沢銈介の多彩な作品の世界
静岡市立芹沢銈介美術館蔵



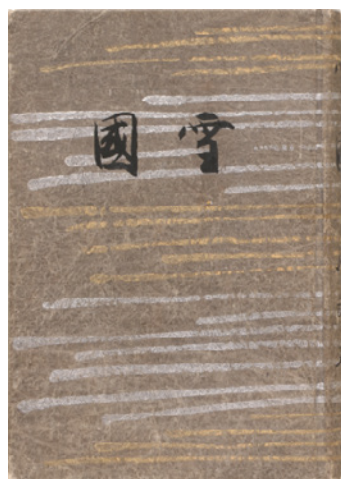
染紙グリーティングカード



型染うちわ



柳宗悦師像



川端康成著『雪国』



「川端康成選集」

本の装丁



貝文着物



縄のれん文のれん



いろは文字文帯地



いろは文風呂敷下絵

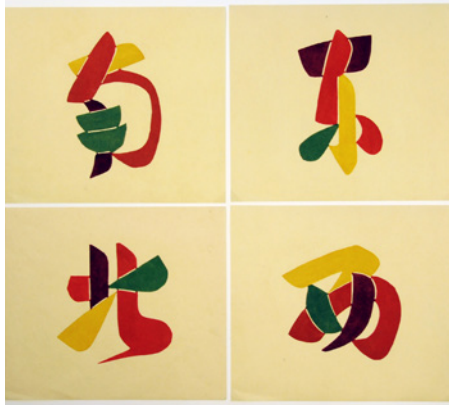


沖縄みやげ二曲屏風

カレンダーリスト（芹沢銈介作）1946年～1984年

- ・以下のリストは12ヶ月分のカレンダーが揃っているものを中心に掲載しています。
- ・掲載の画像・情報等の引用・複製は禁止です。
- ・日本民藝館などにも収蔵がございます。

No	西暦	和歴	収蔵館
1	1946年	昭和21年	東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館
2	1947年	昭和22年	女子美術大学美術館
3	1948年	昭和23年	女子美術大学美術館
4	1949年	昭和24年	女子美術大学美術館
5	1950年	昭和25年	女子美術大学美術館
6	1951年	昭和26年	静岡市立芹沢銈介美術館，東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館
7	1952年	昭和27年	静岡市立芹沢銈介美術館
8	1953年	昭和28年	静岡市立芹沢銈介美術館，女子美術大学美術館
9	1954年	昭和29年	銀座たくみ
10	1955年	昭和30年	柏市文化課（砂川コレクション）
11	1956年	昭和31年	静岡市立芹沢銈介美術館，柏市文化課（砂川コレクション）
12	1957年	昭和32年	静岡市立芹沢銈介美術館，柏市文化課（砂川コレクション）
13	1958年	昭和33年	静岡市立芹沢銈介美術館，柏市文化課（砂川コレクション）
14	1959年	昭和34年	柏市文化課（砂川コレクション），静岡市立芹沢銈介美術館
15	1960年	昭和35年	静岡市立芹沢銈介美術館，柏市文化課（砂川コレクション）
16	1961年	昭和36年	柏市文化課（砂川コレクション）
17	1962年	昭和37年	静岡市立芹沢銈介美術館，東京国立近代美術館工芸館，柏市文化課（砂川コレクション）
18	1963年	昭和38年	静岡市立芹沢銈介美術館，東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館，東京国立近代美術館工芸館，柏市文化課（砂川コレクション）
19	1964年	昭和39年	静岡市立芹沢銈介美術館，女子美術大学美術館，柏市文化課（砂川コレクション）
20	1965年	昭和40年	柏市文化課（砂川コレクション），女子美術大学美術館，東京国立近代美術館工芸館
21	1966年	昭和41年	静岡市立芹沢銈介美術館，柏市文化課（砂川コレクション），女子美術大学美術館
22	1967年	昭和42年	静岡市立芹沢銈介美術館，柏市文化課（砂川コレクション），女子美術大学美術館，東京国立近代美術館工芸館
23	1968年	昭和43年	静岡市立芹沢銈介美術館，柏市文化課（砂川コレクション），女子美術大学美術館，東京国立近代美術館工芸館
24	1969年	昭和44年	柏市文化課（砂川コレクション），女子美術大学美術館
25	1970年	昭和45年	静岡市立芹沢銈介美術館，柏市文化課（砂川コレクション），女子美術大学美術館，東京国立近代美術館工芸館
26	1971年	昭和46年	静岡市立芹沢銈介美術館，柏市文化課（砂川コレクション），女子美術大学美術館，東京国立近代美術館工芸館
27	1972年	昭和47年	静岡市立芹沢銈介美術館，柏市文化課（砂川コレクション），女子美術大学美術館，東京国立近代美術館工芸館
28	1973年	昭和48年	柏市文化課（砂川コレクション），東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館
29	1974年	昭和49年	静岡市立芹沢銈介美術館，柏市文化課（砂川コレクション），東京国立近代美術館工芸館，東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館
30	1975年	昭和50年	柏市文化課（砂川コレクション），東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館
31	1976年	昭和51年	静岡市立芹沢銈介美術館，柏市文化課（砂川コレクション），東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館
32	1977年	昭和52年	静岡市立芹沢銈介美術館，柏市文化課（砂川コレクション），東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館
33	1978年	昭和53年	柏市文化課（砂川コレクション），東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館，東京国立近代美術館工芸館
34	1979年	昭和54年	静岡市立芹沢銈介美術館，柏市文化課（砂川コレクション），東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館 "
35	1980年	昭和55年	静岡市立芹沢銈介美術館，柏市文化課（砂川コレクション），東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館 "
36	1981年	昭和56年	柏市文化課（砂川コレクション），東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館
37	1982年	昭和57年	静岡市立芹沢銈介美術館，柏市文化課（砂川コレクション），東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館
38	1983年	昭和58年	柏市文化課（砂川コレクション），東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館
39	1984年	昭和59年	静岡市立芹沢銈介美術館，女子美術大学美術館，柏市文化課（砂川コレクション），東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館



あとがき

「芹沢銈介」との出会いは当館収蔵の「東西南北」という四枚組の作品であった。懐かしさ，ユーモア，躍動感，健康的で絶対的な安心・・・作風を表す様々な言葉が思い浮かぶ。こんな卒業生が東工大

にいたのかと，衝撃を受けた。数ある作品の中から38年間作り続けられ，現在も愛されている「カレンダー」をテーマに調査をしたいと考えた。また自分とのいくつかの共通点（私の勤務先＝彼がデザインを学んだ東工大，私の母校＝彼が教員として在籍していた武蔵野美術大・女子美術大，私の郷里＝彼の長男と次女が大人になって住んでいた宮城県）が調査を始める後押しとなった。

調査期間中（2019年～2020年），2019年9月，10月に日本各地で大型台風，年明け1月は新型コロナウイルス感染症など，これまでに体験したことのない事態が起こり，現在もまだ収束の兆しが見えていない。このような不安が募る現実に直面したとき芹沢であったらどうするか，ふと考えた。おそらく普段通りスケッチを描き，静かに一日一日製作に向き合うだろう。希望に溢れる明るい色彩とモチーフによって日常に寄り添ったものづくりを続けるのではないだろうか。

2019年の夏に女子美術大学美術館，東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館で実際にカレンダーを閲覧させていただき，力強く鮮やかに染められた和紙を目にすることでものづくりの実直さを体感した。11月には急なお願いにも関わらず，カレンダー製作の中心的存在であったお弟子さんの山内武志さんの工房見学をご快諾いただき，当時の芹沢とのやり取りのお話を伺うことができた。お話を伺う中で共通して感じたのは芹沢の気高いものづくりに対する姿勢である。それは先人たちの鍛錬された技術と和紙や布地等の材料への感謝，それらが生きるように絵をのせるという芹沢の哲学でもある。このカレンダー調査にご協力頂いた芹沢恵子様はじめ，関連の美術館の方々やお話を聞かせて頂いた皆様に厚く御礼申し上げます。芹沢のカレンダーが今後も私たちの日々の彩りとなりますように。

2020年3月16日 桐明紀子



追補

蒲田「芹沢染紙研究所」について

(研究所の見取り図と協業の様子)

芹沢銈介と協働での物作り

本文中にカレンダーの量産制作場所として登場する「芹沢染紙研究所」は一体どのような場所だったのだろうか。1934年(昭和9)、拠点を静岡から東京蒲田へと移し、その後は没年1984年まで約50年間に及び(一時戦災に遭い離れたが再び戻った)蒲田の地で生活と制作人生の後期を呑川の隣で過ごしたとあっていいだろう。芹沢は蒲田で「どんきほうて」「法然上人絵伝」「いろは紋屏風」など多くの大作も工房で生み出し作家として飛躍を遂げた。これらの制作拠点であった研究所はどのような場所であったのだろうか。文献資料と共に、当時の弟子や元所員、親族からの貴重なお話をもとに、芹沢の生活スタイルも含めた当時の様子などを追っていきたい。

「芹沢染紙研究所」は正式には「有限会社芹沢染紙研究所」という名前で、1955(昭和30)年に設立された。場所は東工大がある大岡山からほど近い現在の蒲田区西蒲田に位置する。(現在は呑川沿いの跡地に記念碑が立っている)

芹沢が集団でのものづくりを目指したきっかけは、柳宗悦の考え方への共鳴であった。1934年6月に、柳を会長とした日本民藝協会が発足し、東京近郊に新作工藝の工人達の集団をつくらうという話がもちあがった。東京は物作りのための人手や材料の調達などの面で恵まれており制作にはうってつけであることが理由である。

柳から相談を受けた工藝協会の一員で商工省(東京鉱山監督調査)の水谷良一が、蒲田に物作りの集団「蒲田協団」を創設することを目指し、

東京市蒲田区蒲田町127番地(現在、大田区西蒲田4丁目20番地15号)に土地500坪を用意した。元は関東大震災後に水谷の父が買っていた土地であったという。

同年3月に芹沢一家と弟子や職人(岡村吉右衛門、塩沢寅之助)と共に移り住み、住まいと工房を設けた。翌年には、静岡の袋井から柳悦孝(染織家、柳宗悦の甥)が隣の土地に引っ越しをし、弟の悦博も兄のもと染織の道に入った。その後鈴木繁男(漆工芸作家)が上京し共同で生活と制作を共にした。若手の工人達は、芹沢達のあとを追うように次つぎに蒲田に集まり、それぞれの家族も一緒であったため敷地内は大所帯であったようだ。染め、織り、漆などの異なる工人達が一緒になることで柳や水谷が理想とした協働体が生まれたのだ。

『工藝』76号「芹沢さんと蒲田協団」の水谷の文章で「芹沢一家移住の翌七月、同じ地内に悦孝君が移って、新しく機械の音を立て、ここに染と織が一つに結ばれた(以下略)。染、織、漆の三部門に亘って各々その特技に忙しい。これらの人に芹沢さんの大家族が加わって、嬉しいことにみんな仲がいい。友愛の絆で固く結ばれた小さな協働体が生まれた」と書き残している。

柳は1927年に発表した新作民藝運動の提案書「工藝の協団に関する一提案」で、複数の人が協力して物作りを行う「工藝的ギルド(協団)」の考え方を提案している。この提案では、工芸品を作る際には工人同士が協力することが必要であることが訴えられている。実際に京都で「上加茂民藝協団」という協団が設立され、木工、織物、金工の作家たちが集まっ

て制作と生活を共にした。1928年6月22・23日、京都大毎会館にて「民藝協団作品展」が開催され大成功を収めたが、工房の人たちは共同生活の経験がなく、売り上げに伴う金銭的な格差や作家同士の確執などが原因で、わずか2年半で解散してしまった。同年、芹沢は柳の家を訪ねた際に上加茂民藝協団のメンバーを訪ね、集団での物作りの考え方に触れた。これらが芹沢自身の物作りの考え方の参考になったのではないだろうか。幅広い作家が集まり順調であった芹沢の「蒲田協団」だが、1945年、戦災に遭い住居、工房を失い、作家たちは知人を頼り転居を余儀なくされた。芹沢一家は悦孝の転居先であった青山の村田邸に移り住むこととなった。限られた制作スペースの中で生まれたのが「型染カレンダー」である。1951年に蒲田に土地を購入し住居と仕事場にするために北陸銀行長野支店(のちの黒小屋と呼ばれる建物)と物置を譲り受けて蒲田での再スタートをきった。1955年には、染紙製品の量産に向けて、「芹沢染紙研究所」が設立され、型染カレンダーの生産を飛躍的に伸ばすことに成功した。

工房について

本調査で、工房を含めた1980年代頃の芹沢家一帯の様子を、芹沢本人が手書きした見取り図(p.17)をもとに、関係者である山内武志さん(浜松在住)、坂口洋子さん(千葉在住)のご協力のもとに書き起こしを行った(外観などがわかる参考資料として提供いただいた写真を添付)。敷地の建物群は改築・改修などが重ねられ、1980年代頃では、工房を含めて六つの建物と貼り場が存在していた。研究所での仕事は主に販売する商品

の布（風呂敷、宅布等）、紙（カレンダー、ハガキ、クリスマスカード、うちわ、扇子など）の制作が行われていた。一方で、のれん、着物、額絵、屏風等は「作品」として制作され、布を染める所員が助手をしていた。

芹沢工房の中で、紙の制作を担当していた山内武史さん（浜松市）にお話をうかがった。山内さんは研究所が設立された翌年に入所し、6年間在籍していた。当時、工房はまだ整備が進んでおらず、人員も少なかったため、最初の仕事はトタン屋根の剥がしであったそうだ。主にカレンダーやうちわ、扇子、クリスマスカード、染紙などの生活で使用するものの制作や、内職に依頼する際に添える色見本の制作を行っていた。工房内では板の間と土間それぞれに責任者が配置され、制作の段取りや内職から仕上がってきたカレンダーの確認も行っていた。

見取り図中央に書かれている新工房は1955年に新築されたもので二階建てになっており、一階には布や大きな作品の仕事をする「土間」と、カレンダー等の紙の仕事をする「板の間」があった。「作業場」と呼ばれるスペースがあり、作業台（卓球台が使われていた）に仕上がったものを広げ置き、荷造りを行っていた。二階にも一部板の間があり、「事務所」と住み込みの者が使用する「寝室」なども備わっていた。糊付けした際の糊を洗い落とす「水元」の担当で藤田さんという女性の所員が働いていた。彼女は糊を水の中で落とす仕事の他に、のれんのクリーニングや、修復などの縫い仕事も行っていたという。水元は出口の近くにあり、外に出るとすぐに「張り場」で干し作業ができるという作業動線であった。

型染の仕事の主に行っていた工房、芹沢の仕事場兼来客用の応接間（広間と呼ばれていた）のある二階建ての板倉、芹沢の生活の場である自宅、小島恵次郎（染色家）宅、一階に今岡宅（芹沢の長女規恵夫婦）、食堂、

二階には所員らが使用していた寮などが入った建物、染めの糊作り、スクリュー製作などや芹沢本人の仕事場として使用されていた「黒小屋」と呼ばれる建物があった。

調査に協力くださった坂口さんは、1966年12月から5年間に渡り事務の仕事に携わっていた。地元の長野県の民藝店で働いていたことがきっかけとなり研究所に勤めることになった。工房の二階に事務所があり、事務員が常時配置されていたようでそこで事務の仕事に携わっていた。事務員の中に、杉原さんという男性所員がいて彼が中心となり、4名程で販売店（主に民藝店）から注文された品の伝票処理、荷造り、発送、所員の給与計算等などの仕事が行われていたようだ。また研究所と芹沢宛に依頼がきた仕事は別であり、事務が窓口となり事務所員が目を通して芹沢に声を掛けていたようだ。仕上がったカレンダーやうちわなどの梱包なども事務の仕事で、一階にある仕事場にある作業台で作業を行い、当時旧国鉄蒲田駅近くにあった集配所に荷物を出しに行っていた。うちわは、たくさんの種類が作られていたため作業台の場所が足りない時は外にまで並べ、種類を組み合わせ、重ねて入れることができないため互い違いにしてダンボール詰めを行っていた様子などを教えてくださった。坂口さんはそれらの経験からか、荷造りがとてもお上手で無駄のない美しい梱包で資料など度々送付くださったことがとても印象的である。また染めを今も行っており、美しい箸袋を同封くださった。

研究所の就業時間は朝8時から午後5時頃であり、若い青年たちが共同生活を共にしながら仕事を行った。終業後は工房が使われていないため、国画会（芹沢が審査員になっていた）や日本民藝館展などの出品に向けて、仲間同士競い合いながら自身の作品作りに没頭したそうだ。一方で芹沢の展覧会前は土間に集合し、作品制作や展示のレイアウトなども深夜ま

で手伝いをするこもしばしばあったという。また、染紙研究所には事前予約でツアーに訪れる団体客・個人客もいたそうで仕事場を案内したり、希望者には販売などもしたりしていた。

所員について

研究所には、山内さんを始め染物屋の跡取りであり修行のための所員、中学・高校を卒業後の青年達や美大を卒業してすぐの女子学生、近隣に住む女性など様々な人々がいたようだ。退職後も自宅で色差しの仕事を委託されて染めを行うなど、関わり方も様々であり芹沢のまわりには常に多くの人が仕事に関わっていたことが伺える。坂口さんもその1人であった。最も多い時期には20名ほどの所員が働いていたという。所員は全国から研究所を訪れ、芹沢は彼らの出身地の風物（祭りや玩具など）に関心を抱き、それらをカレンダーの図案のモチーフとして描いたこともあったという。

芹沢の誕生日（5月13日）には仕事はお休みにし、所員の取り仕切りのもとで、外部のお客さんを招いたり、近所の飲食店や屋台のおでん屋さんがきて模擬店のように料理が振る舞われたりしたそうだ。休日や年末などには食事会や旅行などを楽しんだ。

芹沢のご令孫である伊藤京さんに伺ったところ、所員との日常がうかがえるエピソードを教えてくださいました。展覧会のポスターが送られてきた時、芹沢が弟子に「これ仕事場に貼っておいて。」と渡した。しばらくして弟子が母屋に来た時、「この間の展覧会に誰か行ってきたかい？」と訊ねたところ、「いいえ、まだ…。」との返事が返ってきた。それから何日かしてお弟子さん達が、「先生、展覧会行ってきました。」と報告に見えた。「そうか。」と少し話をして皆さんが仕事場に戻られてから、「何でもみんまで行くのかなあ…。」とつぶやいたという。弟子との時間を愛した芹沢の姿がうかがえる。

研究所での芹沢の様子

義理娘の芹沢恵子さん、伊藤さんにお聞きした芹沢の日常の様子は次のようである。

7時：起床
8時：朝食
9時～12時：仕事(10時、お茶)
12時：昼食
13時～17時：仕事(15時、お茶)
19時：夕食
23時：就寝

研究所の所員と同じ就業時間の中で仕事をしていましたが、仕事内容によって場所、時間もいろいろで、夜中まで働くこともあった。芹沢は食についてもこだわりがあり、朝はパンと紅茶で、お昼はお手伝いさんが作るミニ焼きおにぎりが大好物であった。夕飯にはまぐろのお刺身や焼き魚、牛肉のすき焼き、それに妻のたよさんが作る牛タンとちぎりこんにゃくを醤油で炊いた料理は息子の長介さんも好んでいて度々食卓にのぼったそう。

伊藤さんも仙台にお住まいであったため、夏休みに蒲田に行くのが楽しみであったようだ。芹沢は食卓テーブルでも型紙を彫り、仕事をしており釈迦十大弟子の制作時には資料を調べたり、2階の和室で依頼された絵皿の下絵を描いたりなど仕事によって様々に場所を変えていた。ある晩 芹沢が広間で仕事をしている時に、妻のたよさんが伊藤さんに「あんた御祖父ちゃんが寂しがるから、様子を見に行っちゃおうだい。」と頼まれて 仕事場に向かった。たよさんは頃合いを見計らってお菓子とお茶を持って行き、話をしたりさりげなく手伝ったりするのが常であったようだ。また恵子さんもご主人の長介さん(芹沢の長男)の仕事の都合で、普段は仙台にお住まいであり、夏休みなどに蒲田に帰省した。その際も身近で型彫りをしている姿をよく目にしていたという。制作の様子を以下のように回想している。「ベニヤ板にのせた型紙が図案に沿って小刀の先で切りはなされ、小刀の先から型

紙がピヨンピヨンとテーブルの下にはじき落とされてゆくさまをはじめて見た時はほんとうにおもしろくて目が離せませんでした」。ストイックな職人氣質なイメージだが、人との程よい距離感のもと制作を行う意外な一面がうかがえた。

最後に

本調査で、芹沢は個々の所員の特性を見ながら弟子と共に仕事をし、今日まで愛される型染カレンダーを生んだことは柳の理想とする「用の美」の実現であり、民藝運動において確かな成果と言えるのではないだろうか。芹沢の弟子で染色家の柚木沙弥郎氏は工房でのカレンダー制作を以下のように話している。「芹澤先生の業績というものは、常に芹澤先生がすべてなんだけれども、大勢の人が手伝っていて、その集団で生まれるものを理想にしていたんですよ。…(一部略)…、だから芹澤先生はカレンダーの製作が好きなんですよ」。カレンダーは所内外の関係者が制作に携わっており、戦前・戦後に蒲田の地で芹沢にとって理想の制作が実現されたことがわかる。

芹沢恵子様、伊藤京様、山内武志様、坂口洋子様には、この度、工房の様子などを教えていただきました。大変ありがたく、感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

増補版

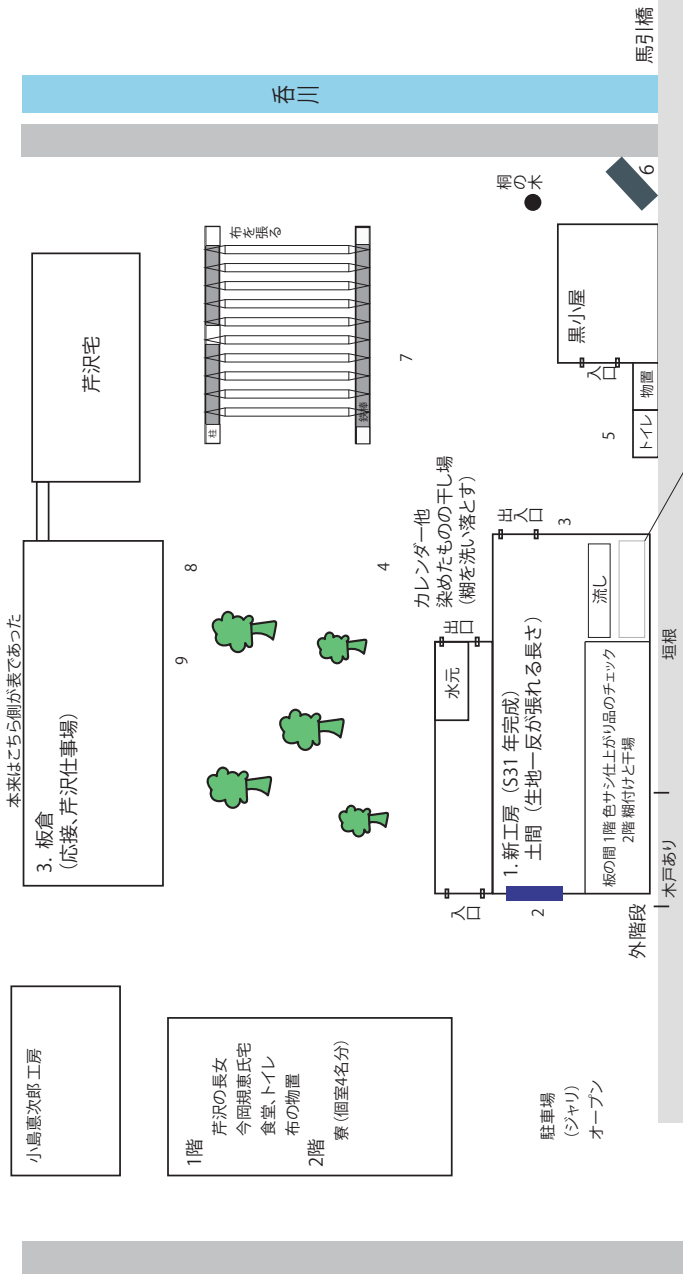
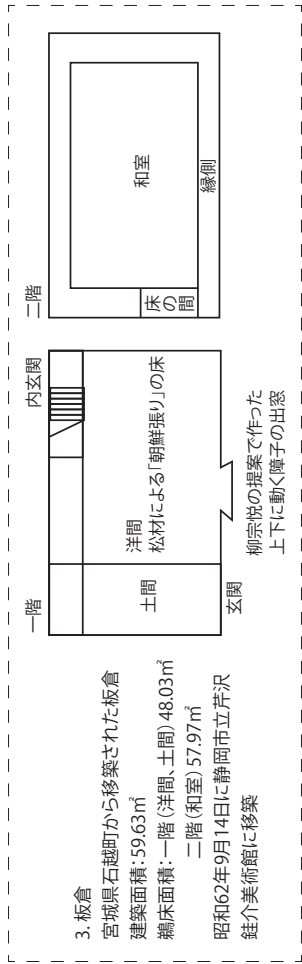
2023年5月

執筆：桐明紀子

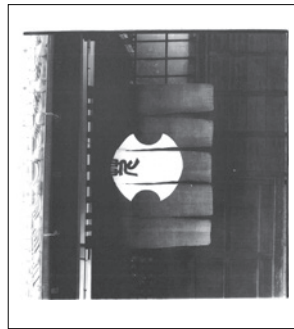
発行：東京工業大学 博物館 資史料館部門

芹沢染紙研究所周辺 女塚二丁目(現、西蒲田)(1980年頃)
全体約500坪

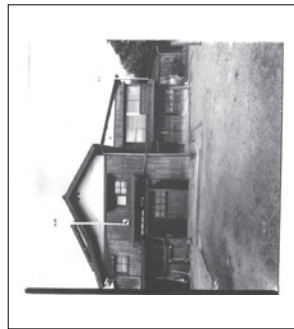
撮影:村田仙三
画像提供:芹沢恵子 静岡市立芹沢銚介美術館
協力:山内武志 坂口洋子
(元芹沢染紙研究所)



1. 新工房で色差しをする芹沢銚介(1976年)
布の仕事場は天井までふき抜けであった
画像提供:静岡市立芹沢銚介美術館



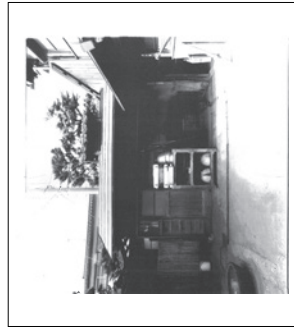
2. 工房に掲げられていたのれん



3. 新工房の裏口



4. 庭から板倉をみる



5. 黒古屋(北陸銀行の書庫だった建物を取り入れた)トイレ、かまど、むし器、せいろ
糊などのねり鉢が置いてある様子



6. 現在、跡地に立つ記念碑



9. 板倉周辺



8. 板倉周辺
芹沢がデザインした鉄製の椅子



7. 張り場(黒小屋の方角から見ている)